
虹色ビーダマと天使さん

柚稀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虹色ビーダマと天使さん

【Nコード】

N6921C

【作者名】

柚稀

【あらすじ】

自然の産物か、太古の兵器か。強靱な力が手に入る、七色のビー玉が存在する。全く正体不明なそれを奪い合う者達。その戦いに、普通の高校生、玲夜と梨緒が巻き込まれてゆく。高校生とビー玉が織り成す、ファンタジックラブコメディ！

プロローグ（前書き）

こんにちは。あらすじ部分に「ラブコメディ」という言葉を入れるのにほんの少しの抵抗を抱いた柚稀と申します。

ここへの掲載は初めてですが、個人的には三作品目です。

プロローグ

紅く妖しい、漆黒の空

枝にとまる、一つの鳥からす

尾と嘴くちばしの紅い、一つのカラス

「これはこれは。ようこそ、物語の入り口へ」

何処からともなく聞こえる声

在るのは鳥のみ

「……『非現実』とは、『現実』という名の壁に囲まれた空間の、すぐ隣に在るもの

『非現実』へと続く扉は、すぐそこ、目の前に在るのです。ただ、それを見つけられる存在は極わす僅か。

その扉の前に、貴方は今立っている。その事柄は、まさに『現実』。開くか開かぬかは、貴方様の自由に御座います。

……さてさて。そろそろ舞台の役者方は準備を整え終えたようです。貴方はどうでしょう。

『非現実』の扉を開く方は、どうぞ中へと御進みください。そこには既に役者様が立たれておいでです。

それでは、『現実』から『非現実』へと繋がる扉を御開きください。
い。

新たな亜空間へと、誘^{いざな}って差し上げましょう」

紅き鳥、空へと羽ばたく

One Marbles 平和な日常

爽やかな気分でのこの『公立 東高校』に入学してから、早一ヶ月がたった。

俺のクラスは男女共に同じ中学からの出身があまりおらず、友達と言っやつがもう驚くぐらいできない。

はあ……。

まあ、男子は数人出来るのだが……問題は女子だ。

俺、『瀬戒^{せかい} 玲夜^{れいや}』は女子が苦手なのだ。

ゆえに、今までの人生で彼女なんてものは一度も出来た事はない。

いや、ついこの前一度だけラブレターと言うもので呼び出しをされたのだが、勇気がなく行く事が出来なかった。あゝあ、俺ってホント意気地なし……。

で、今俺は授業中だ。

ホント数学と言うやつは解らない。前でまだ名前すら覚えていないオヤジが色々話しているが、やっぱり解らない。

ああ、数字を見てると眠くなる……。多分俺だけじゃない。ほら、隣に座ってる黒髪少女 名前なんだっけ？ も、うとうとしてノートの所々に要らんフニャフニャした線があるし。

やべえ、本格的に眠いし……。よし、決めた。この授業の残り時間は俺の貴重な睡眠時間にするとうしよう。と決意した途端、

キーンコーンカーンコーン

ええ〜……。

玲夜とクラスメイトの大半にとってかなりの拷問的授業の数々も終わり、昼休みになった。

「いんやあ〜。それにしてもさ。やっぱり難しいんだなあ。高校の授業ってさ」

玲夜は毎回の昼休みに、机を向かわせ弁当を一緒に食べている高^た城^{かき}と、今日も毎度のように弁当を食べているのである。

「難しいってお前、毎時間毎時間寝てていびきをクラス中に響かせてるやつ言うセリフじゃないぞ？ それ」

玲夜は好物のミートボールを箸で口に運びながら、高城にそう言った。

「だってさ。前にいる先生が俺にだけ催眠電波を集中砲火してくるんだもん！」

「『してくるんだもん！』ってかわいく言ってるじゃねえ。百パー言い訳だ」

「はあ……彼女ほっし……」

「……どこからそんな話が出てきた？」

かなり訳が分からない思考の持ち主。そんな紹介がされる高城である。

「お前まだ彼女いねえのかよ」

「……う、うっせえな。そう言う高城はいるのかよ？」

「ふん！ 俺は彼女をつくらない主義だからな！」

……いるよね、こっぴうヤツ。

「大きさ。なんなん？ お前のその髪。長めの茶髪でさ、それより長いモミアゲなんか赤く染めちゃって。不良かっつての」

「……だからさ、どっからそう言う話になるんだっつの」

髪の話は誰に言われても仕方ない。描写通り不自然なのだから。

とは言っても、別に彼は好きでやっているわけではない。元々髪色は薄く、親が「カツコイイから」という理由で勝手に染めているからなのである。

そんなどうでもいい会話をしながらの弁当タイムも終わり、する事もなく、まだ時間があったので、そろそろ入ろうかと思っていた部活動を決めるため、各部室の集まっている『第三棟』に足を運ぶ事にした。

まだ昼休みと言う事もあって、第三棟には人気はないに等しく、外の風で廊下の窓が揺れる音しか聞く事は出来ない。

そこで玲夜は、まず入る部活の候補を幾つか上げようと、廊下から全ての部室を見て回る事にした。

野球部。

スポーツ万能の玲夜が入れば即効レギュラー確定と思われたが、玲夜は自分の身体能力を過小評価していたため、あえなく没。

サッカー部。

上記と同様の理由により没。

文芸部。

玲夜は本を読むと十秒以内に寝てしまうという特性を持っているため、没。

美術部。

玲夜の絵は、以前小学生の弟の絵と親に比べてもらった結果……あえて言わないが、その結果を思い出し、玲夜は迷わず没にした。

ドレミソ部。

意味不明なため没。

レイマー研究部。

……なにそれ？ 玲夜の足が止まった。いや、入りたかったわけではないが、ただこの部室になにか特別な雰囲気を感じたからだ。……勘違いと思われるが。

「貴様！　そこで何をやっている！」

突然、横から怒鳴り声があったので、玲夜は肩が上がるほど驚いた。

「は、はひっ!?!」

間抜けな声を出し、声の聞こえた方に顔を向けた。

そこには濃いめの茶色、長髪の少女が腕組みをし、立っていた。見た目からして同学年と思われるが、女子には果てしなく疎い玲夜には見た事のない顔であった。

かわいい……。女子が苦手な玲夜でもそう思えるほど、その少女は整った顔立ちをしていた。

「質問に答えろ！ 貴様はそこで一体何をやっている！」

再び怒鳴られ、玲夜は慌てながらも必死にどう答えようかと考えていた。いや、普通に「部活決めをしていました」と言えば済むだろうに。

「あ、あの……。し、失礼しましたあー！」

完璧に何かしらの勘違いを呼びそうなセリフを言い残し、走り去っていく小心者。馬鹿だ……。

「……。あやつ、ココが見えたのか……」

その少女は呟き、「レイマー部」と書かれている部室へと姿を消した。

俺は走ってきた。どうやら教室まで。しかも遅刻だ……。

息を切らしながら、俺は教師の「はよう座れ」と面倒くさそうな口調で放ったセリフを受け、自分の席に着いた。

ふう、ふう……。

……あ、あれ？　なんで俺逃げたんだ？

ああもうワケわかんねえよ俺！　そして馬鹿だろ俺！

なんで逃げてんだよ！　百パーセント怪しいやつだろ！

……はあ……。早く慣れねえと……。女子……。

その後の授業は何事もなく終わり、まだ部活に入っていない一年

生は全員帰路についた。

「おっじゃあ！ 帰ろうぜ！」

後ろから高城が肩を強く叩いて言った。まあ、いつもの事だけど。

「ああ」と生返事を返し、俺も他の生徒達と同じように、高城と帰宅する………筈だったのだが、

突然、背中に大きな衝撃が。

「うをッ!?!」

「きゃああつ!?!」

俺はその衝撃により前に倒れ、顔面を昇降口前のアスファルトに額をぶつけてしまった。しかも背中になにかが乗っているような感触もする。

「お、おい!?! 大丈夫か玲夜!?!」

高城がなにか言っているが、それより先に、俺はこうなった原因を探る事にする。

そう時間はかからなかった。多分二秒ちよい。

女子生徒が俺にぶつかってきたのだ。背中に乗っかっているのはその女子生徒。

彼女は、あわわッとか言っていて素早く立ち上がり、

「す、すみませんでした！ あの、本当にすみませ……すみませ
ん！！ だ、大丈夫ですかっ！？」

額をさすっている俺に、噛みながらも謝罪をした彼女は、そう言
って俺の手を掴み、俺を立たせようとした。が、さすがに女の子が
高校生男子を一人で立たせる事は難しいらしく、全く動かなかった。

俺はそれを予想していたので、自分で立ち上がった。

「あ、いや、大丈夫。ありがと……っとうわあ！！」

女子に触れている事に今頃気づき、即効彼女の手を振り払った。

「？」

その行動を不思議そうに見ている彼女。よく見れば結構可愛い。

黒のショートカットで、長い前髪は8：2くらいの右分け。左右
を縛る、肩届くほど長い黄色のリボンが風になびいている。

「あ、あの、血が……」

彼女は俺の額を見てそう言った。触って見ると痺れ、指に赤い液
体がついた。

「……ホントだ。洗ってくるか。高城、待っていてくれる？」

二人のやり取りをニヤついて見ていた高城。実に腹立たしい。

「おう。待っててやるから洗ってこーい」

「サンキユ」

「あの……私も着いて行きます。私の所為だし……」
と彼女。

「いや大丈夫。お、俺一人でいいよ」

軽く動揺する俺。こなくてももいいという気持ちはあるが、それ以上女子から早く逃げたかった俺。

「そ、そうですか……」

少し残念そうな表情。

「じゃ、行ってくるわ。高城」

走り出そうとするど、

「……あ、あのー！」

彼女に引き止められてしまった。ああ、早く俺を逃がしてくれ……。

「あ……えと……本当に……その……」

もじもじしながらなにかを呟く彼女。早くしてよ……。

「……やっぱりいいです……すみません……」

結局なにも言わないのかい！　なんてツッコミをしている間に、
しつこいようだけど早くこの場から立ち去りたいので

「ん」

一言、いやー文字言っただけ水道のある校舎裏まで走った。

動く日常

三人称

「早く慣れなきゃって言ったってなあ……」

少年 瀬戒 玲夜は、校舎裏の水道に行く途中、自分一人しか聞こえないくらい小さな声で呟く。

「一体どうやって……」

彼は、近くの木にとまっていた鳥が逃げ出すほど、大きく溜息をついた。

既に少し固まりかけた額の血を洗い流し、昇降口に戻ろうと校舎の角を曲がった瞬間、

その角を曲がってきた、段ボール箱を山積み抱えた人にぶつかってしまった。

「いつて……」

幸いか、今回は額をうつ事はなく、ただアスファルトにしりもちをつくのみだった。

ぶつかったのはある女子生徒。なのだが、

「つく……！ おい貴様っ！！ 歩く時はしっかり前方を見て歩けっ！！ ……ん……？」

その少女は、何かを思い出したように玲夜の顔をまじまじと見た。

玲夜は何かに気付き、顔を少し歪める。

「貴様、確か昼休みの……やはりそうか。貴様はあの時の不審者」

不審者とは失礼な。玲夜は少しムツとなった。が、反論は出来るはずもない。玲夜なのだから。

「た、確かにあの時は怪しい事を言いましたが、俺はただどんな部活があるのかと、部室を見て回っていただけです……」

やっと誤解を解く事が出来たと思われたが、その言葉が信用できないのか、彼女はまだ疑う目をやめない。

「……ふん。まあその事は良しとしよう。だがな、それとこれとは話が別だ。お前にも先ほど散らばった荷物を拾ってもらおう」

今まで玲夜は気が付かなかったが、さっきぶつかった時に段ボールの一つが開き、中身が散乱したらしく、そこら中に色々な機材や部品が散らばっていた。

「は、はい」

いそいそと拾い出す玲夜。しばらくして全てを拾い終わり、

「では、私は忙しいから行かせてもらっぞ」

そう言っつて、彼女は玲夜達が通常授業を受けている第二棟の後ろにある第三棟に歩いて行った。

「はぁ……当分無理そうだな……あのタイプは……」

玲夜が息をつき下を向くと、ちょうど足で見えなかった所に、半分に分かれたビー玉を見つけた。

なんだこれ？

ちよつとした好奇心でそれを拾いあげた。多分さっきの子の物だろう。

「……綺麗だなあ……」

玲夜の言葉通り、そのビー玉はまるで紅蓮の炎のように真っ赤で透き通っている。綺麗以外にぴったりな形容詞がないほど。

「……つて見とれてる場合じゃねえ。早く渡しにいかねえと」

まだそう遠くには行ってないだろう。そう思い、玲夜が立ち上がった瞬間、突然ビー玉を握っていた左手が輝き出した。

「な、なんだ!？」

見てみると、実際に輝いていたのは左手ではなく、『ビー玉』だ

った。

そのビー玉は眩い光を放ちながら宙に浮き、物凄い速さで、驚愕の表情を続けている玲夜の胸辺りにぶつかつた。

「なっ!? いった……あ、あれ……? 痛くない……」

確かに玲夜はビー玉が自分の胸に当たるのを見たが、全く傷みを感ずる事はなかつた。それどころかいつの間にか光は収まっており、ビー玉自体も無くなっていた。

玲夜は不思議に思い、胸、その他身体の所々をはたいてみたり周りのアスファルトの上を見たりしたが、ビー玉を見つける事は出来なかつた。

「……見間違い……? いや、ちゃんと触った感触したし……」

はて? と考え込んでいる所に

「おい、玲夜ー。まだかー。……って、何やってんだお前? そんなところに座りこんでポケ〜つとして」

角から顔を出した高城がこつちを見た。やっと思考の海から抜け出した玲夜は高城を、ゆつたりとした動きで見る。

「……ん? ああ、高城か」

「高城か。じゃねえよ。お前デコ洗いに行くのに何十分掛かってんだよ。俺は早く帰りにえんだ。帰ろうぜ」

「お、おう」

玲夜は立ち上がり、ズンズンと歩みを進める高城の後をついて行った。

多分、あれだな。白昼夢ってやつだ。そうだ俺は夢を見ていたんだ。そうだな。そうじゃなきゃあんな事ありえないもん。

訳の解らない事態に直面した時、誰よりもポジティブになる事が出来る。それが彼 瀬戒 玲夜の長所の一つだった。

瀬戒家に帰った玲夜は、いつも通り疲れた身体に少しばかりの休息を与えるべく、自室の勉強机の側面にくっつく様に配置されているベッドに身を投げた。

「は〜あ。今日も疲れた……………」

……………あれ？ もう寝てる……………。

玲夜が目を覚まし、脳がすっかり機能するようになった頃には、とつくの昔に太陽は西に見える大きなマンション達に沈み、空は墨汁でも塗りたくったように真っ黒で、地球外から見れば微かに等しい街の光に照らされ、夜空の縁をなぞる様についての群青色が、かなり空を幻想的に演出していた。

そんな夜空を、彼女と一緒に見れたらいいなあ、とか思いながらテラスに出て、少々錆びついた手すりにもたれながら見上げている玲夜。

はあ。どうすれば慣れるんだろう……。

そうだ。大いに悩め少年。そしていつかその背中に羽を生やし羽化するのだ。……なんて、たかが地の文がどうのこうの言ったところで彼の悩みに解決策が見つかるわけでもなく、彼はもう一度大きく溜息をついた。

ふと夜空を見上げると、その墨汁のような夜空に一つの白い線が現れ、すぐに消えた。

流れ星……か。

そう思った玲夜は、両手のひらを顔の前に合わせ、目をつむった。

まあ気休めくらいにはなるだろうと、行動にうつしたのだ。

「どうか素敵な出会いが出来ますように……」

……うわあ、恥ずかしい……。

二、三秒経ち、彼もやっとそう思ったらしく、すぐに自分の頭を何度も殴り始めた。

「俺は高校生だぞ！？ その上男！！ なんて事を言ってんだ俺は！！！」

そんな事をいながら殴り続け、しばらくたって今までよりも遙かに大きい溜息をつく、とぼとぼと自分の部屋に戻り、窓を閉めカーテンも閉めた。

今、都会の夜空に一つの白い線が現れ、すぐに消えた。

翌日。ファンタジー系のフィクション物語のような突拍子もない出来事の一つもない、果てしなくつまらない罰ゲームの連続のような学校生活がまた通常通り始まった。

「ふあゝあ。ねみゝ……」

そんな一人言を呟きながら、玲夜は高城と共に自分の所属クラスに入り、自分の席に着いた。

「あ、あの……昨日は本当にすみませんでした!!」

隣の席から声が聞こえ、玲夜はダルそうにゆゝっくり首をその方向に回していたが、その声の主が自分の視界に入った時、彼の首の動きが速さを増した。

「あ、あれ？ 君は……昨日の子……？」

「あ……はい」

あららゝ、隣の子だったかゝ。こりやまたびっくり……って隣いいいい!？」

玲夜は声を出さずにこのような事を喉の奥で言っていたので、玲夜の表情はかなり面白い事になっていた。

そう。昨日玲夜の額に傷を付けた少女は玲夜の隣の席だったのだ。普通なら考えられない事だが、なにせ玲夜だ。全く隣の女子を気に掛けない、それが女子の顔を覚えようとしなという事がありえなくはない。というか必ずそのどちらかだ。

「ど、どうされたんですか？ 具合でも、悪くされましたか？」

玲夜の面白……もとい表情を見て、彼女は心配そうな口調で玲夜に問い掛けた。

「え、あ、いや、そんな事ないけど……別に昨日の事は、なにも怒ってないよ」

「そうですか、よかったです」

ほっと胸を撫で下ろす少女。

その動作が終わると、突然、玲夜の顔を見て微笑み始めた。

玲夜が不思議そうにそれを見ていると

「……あ、えと、その……今まで話した事、無かったから……楽しいなあ、って……」

微笑んだまま、後ろ髪を人差し指でくるくるといじりながら言う彼女を、玲夜は複雑な表情でただ見ている。この子だけに限らず、そもそも女子と話した事が数えるほどしか無いので、どんな表情をすればいいのか困っているのだ。

「……！ あ、た、楽しいってそういう意味じゃなくて、その、えっと……」

そういう意味とはどういう意味か。玲夜が理解するには宇宙多重創生論をしつかりと意味を把握できるほどの理解力が必要だ。

ふと、彼女の席の横にかかっている鞆の名前欄を見ると、『天使梨緒』とある。

「……………んし……………」

苗字が読めなく、無意識に声に出してしまった。

「え……………？ ……あ、もしかして、名前の事ですか？」

「……………ん？ ああ、そうそう。その、変わった名前だなあ、って」

隣になって一ヶ月にもなるのに「名前なんて読むの？」と聞けば誰でも怒り出す事くらいは、さすがの玲夜でも悟れた。

「ですよねえ。これで「あまつかりお」なんて読むんですから。

……………れ、玲夜、くんも、結構変わってると思いますよ？」

どこか動揺した感じの口調だったが、若干困惑状態の玲夜はそんな事にいちいち気が付く余裕などあるはずも無く。

「ま、まあね」

……………少しの沈黙。こうなればさっきまで全く気にならなかった周りの音が、音量を上げた様に鼓膜を振動させる。

先に沈黙を破ったのは少女 梨緒の方だった。

「あ、あの、このあい「席に着けえ。ホームルーム始めるぞお」

扉を勢いよく開けた、毎日青いジャージを着ているこのクラスの担任『古本』通称『使い古し』の大声によって、その先はかき消された。ちなみに四十代後半の男である。

先生が来たと言う事で、前を向いた玲夜。

少しガツカリしたような表情で、梨緒も前を向いた。

またつまらない学校生活が通常通り始まる…… 筈だった。

端の方の日常

淡々と時は過ぎてゆき、今は五時限目の最中である。

これまでの休み時間に、梨緒から話しかけられる事はなかった。玲夜から話しかける事はある筈がない。

現在一年五組、つまりは玲夜達のクラスは只今数学の授業中。相変わらず前で催眠電波を今日も飽きずにとばしまくっているおじさん。

こちらにも相変わらず机に突っ伏して気持ち良さそうに夢の世界へレツツゴーな玲夜と梨緒。あ、あと高城。

特に描写する事がないので移動する事にする。さすが神視点。

ここは三年が授業をしている第一棟。

その中の一室、『三年四組』は、現在国語の授業中。こちらにも相変わらず昔の人が暇つぶしに書いた文章の解説を、黒板の前に立って

いる三十路過ぎの女性が教科書片手に話している。

……おや？ 廊下側の一番後ろの席が空席になっている。

机の横に鞆が掛かっているところを見ると、どうやら学校には来ているようである。ちなみに本日このクラスから保健室に行った生徒は一人もいない。

では何故授業に出ていないのか。

……あ、いたいた。その人物の姿は現在、第三棟にあった。

第三棟に並ぶ数々の扉。その、扉と扉の間の壁に、ゆっくりと手を伸ばす女子生徒がいた。濃いめの茶色、長髪の少女である。

伸ばした手が何かを掴み、勢いよく引っ張る。

すると、壁がまるで扉のように開いたではないか。

少女は中に入り、扉 壁を閉じた。

室内は教室の四分の一ほどの広さで、なにかよくわからないボタ

ンがピカピカ光っている機械が壁を埋め尽くし、中央には四角い机が一つ配置されていた。部屋というより、ラボと言っ感じである。

「ああ、大空部長。おはようございます」

「なんじゃ、優稀。今日は随分遅い登場だったのう?」

中にいた少年、少女が、入ってきた少女　大空　優稀を同時に振り返った。

少年は黒髪のショート。当高校の指定制服を身に付けており、身長は大きいほうだが、優稀よりかは小さかった。……優稀が大きいだけか……?

少女の方はボサボサ赤髪のセミロング。こちらも制服で、身長はかなり小さめ。

「すまぬ。机の中に入れていたら見つからなくなってな」

優稀の片手には、指輪が入っていそうな小さな箱。というか、見つからないってどれだけ机の中汚いんだ。

「はあ……頼むから無くすなよ?　それが他の悪い輩の手に落ちれば、この世界は終わるも同然なんじゃからなあ」

「そうですよ大空部長。他は既に吸収されてしまっているんですから」

そう言う二人に、優稀は誇らしげに箱を開けた。

「ふっふっふ。安心せい。まだ一つここに残っているのだから……」

箱の中には眩い輝きを放つ赤いビー玉が一つ入っている。……筈だが……。

優稀とその他二人は、中身を見て絶句した。

「は……」「は……」「は……」

同時にそう言ったかと思うと、次の瞬間、第三棟全体を揺らすかと思われるほどの大声で叫んだ。

「半分無いiiiiiiiiiiiiッッッ!」

(!……なにか聞こえたような……)

一年五組にて睡眠をしている玲夜と梨緒は、突然の鼓膜の振動に目を覚まし頭をあげ、周りを見回した。何も無い。毎日見ている極普通の授業風景。気のせいだろうか。

(気のせい……………)

そう思った二人は、再びドリームワールドへ直行した。

「な、なぜだ……………！」

「し、知りませんよ！ 何処で無くしたんですか大空部長!？」

「私だって知らんわ!!! 一体何処で!!! ……はッ!!! もしやレイマー達の仕業か!？」

「はああ……………。おぬしに持たせたのが間違いじゃった……………」

混乱している三人。

「これからどうするんですか!？ 大空部長!？」

「そ、そんな事聞かずとも分かるだろう!？ 探すのだ!!! 校内をくまなく!!!」

あたふたしている二人を横目に、ボサボサ赤髪少女は頭に手をあて大きく溜息をつく。

「とにかく一刻も早く見つけ出すのだ！！ 満斗^{みちと}、お前は第二校舎を！！ 右京^{みぎきょう}、お前はこの第三棟を！！ 私は第一棟を探す！！」

満斗と呼ばれたショートヘア少年は勢いよく出口から出て行き、それに続くように優稀も机に箱をおき、飛び出していった。

「……………やれやれ……………」

残された右京と呼ばれた赤髪少女も、走って部屋から出ていった。

僅かな日常

下校時間。今日も高城にせかされ急いで用具を鞆にしまっている
玲夜。

「早くしろってー、おっせえなあ」

「うっさい！ 黙ってる！」

そんな会話をしながら、ふと隣の席に目をやる。

(どこいったんだろ)

空席。しかし、まだ用具と鞆は残っている。

(ま、関係ないか)

そう思い、玲夜は再度帰りの準備に戻った。

同じ頃の第三棟。

「あ、あれえ？ 職員室って、何処だっけ……？」

天使 梨緒は迷っていた。それはもうあり得ないほど迷っていた。

用事があり職員室まで行こうとしたが、第二棟から見て、職員室のある第一棟と真逆の第三棟に来てしまったのだ。

「え、えええ……どこお……」

激しく迷ってます。梨緒。

不安ながら歩いていると、一つの扉に目がとまった。

「？ ……なんだろ……」

扉の下の隙間から赤い光が漏れている。上のプレートを見ると、『レイマー部』と書かれている。

開けていいのだろうか……。そう考えたが、好奇心に負けた梨緒はゆっくり扉を開けた。

「し、失礼しまーす……」

開けると、光を遮る物がなくなり強さを増した。

眩しいながらもそれに耐え、光源に近づいていくと

「ビ、ビー玉……？」

それはふたの開いた小さな箱の中に入っているビー玉だった。

「……割れてる……」

そしてそれは半分に分れていた。割れていても光はとても眩い。赤く、まるで鮮血のように。

……触っちゃってもいいよね……？

好奇心にはかなり弱い彼女は周りを一応確認し、ゆっくりそのビー玉を手にした。すると、

「キャッ!? 何!?!」

そのビー玉が光を増し、宙に浮いたのだ。

『もう半身ゲツチユウ!! イエイ!!』

そんな言葉が何処からともなく聞こえ、そのビー玉は梨緒の胸辺りに猛スピードでぶつかつた。

驚きすぎてなにも言えなかつた彼女は、目を瞑つた。

しかし次に目を開けた瞬間、光はいつの間にか収まっており、梨緒の身体は部屋の外にあつた。

「……な、なんだつたの? いまの……」

梨緒は頭の中が疑問譜だらけになつたが、身体にはなんの異常もないので、

「別にいつか」

と、立ち上がった。が、

「……………?」

突然耳鳴りが起こり、

「い、痛い、痛い、痛い痛い痛い!!」

それに伴い激しい頭痛が起きた!

「痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い!!」

頭を強く押さえ膝をつき、何度も何度も「痛い」と連呼し始める。

叫び続けたおかげか、

「ちょ、ちよつと!? 大丈夫!?!」

幸いにもすぐに駆けつけた女性教師が梨緒を抱え、保健室まで運んでくれた。

同じ現象が、第二棟の昇降口でも起きていた。

「痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い!!」

頭を抱えて叫んでいるのは瀬戒 玲夜。靴を履き替えていると、なんの前触れもなく突然激しい頭痛が起きて今に至る。

周りには生徒達が集まってきて玲夜と高城を囲んでいる。みな心配そうな眼差しで。

「ちょ、おま、大丈夫かよおい！」

そういいながら、高城は玲夜を、人だかりをかきわけ保健室まで連れて行った。そして、

今この瞬間、梨緒と玲夜の意識が同時に消滅した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6921c/>

虹色ビーダマと天使さん

2010年10月18日14時25分発行